

釣れ釣れなるままに

2005年思い出の釣行記 PART. 2

お飯事

鹿島釣狂

岩見沢釣遊会第2回大会

☆開催日	平成17年5月15日
☆開催場所	寿都港～永豊港
☆入釣場所	鷹の巣トンネル裏
☆潮	干潮 02:00 4cm
	満潮 16:11 23cm
☆釣果	ホッケ 333 mm 3/13
	タナゴ 278 mm 1
	クロソイ 270 mm 1
	ハチガラ 1
	ガヤ 2
	マガレイ 270 mm 1
	砂ガレイ 3
	アブラコ 270 mm 2
	カジカ 1
	ガンジ 1

	重量	1600g
☆成績	合計点数	771点
	成績	8位
	点数	7点
	累計点	9点(②⑦)

オママゴト

「今年はカレーライス材料を作付けするので力を貸して下さい。」と女房が言う。それで、午前中は猫の額ほどの畑を掘り起こすことになり、ジャガイモとニンジンとタマネギを植え付けた。タマネギは女房が事前に農家のご婦人から苗を分けていただいていたのだが、農業を営んでおられる方にとってみれば「何をお飯事ままごとみたいなことを」と一蹴されてしまいそうな様である。

女房が大会の集合場所まで車で送るといので、オママゴトのような畑仕事が終わった後にビールで喉を潤した。今回は、新しい釣り場を開拓しようと思い、いくつか候補を上げておいたのだが、どこも不案内であり、釣り場へは一部潮漕ぎして岩場の先端に向かわざるを得ないところもあり、釣り仲間にもう一度確かめてから、暗い内の入釣が無理なようなら前回と同じワスリでと考えていた。

集合場所では雨が落ちていたので、すぐに島氏の車に乗り込む。西川氏や高橋氏も乗り込んでおり、ねらいの一つである寿都赤灯台左右の様子を聞いてみる。西川氏は丁寧に教えてくれるのだが島氏が「溝がいくつもあるが、難しくはない。」と言うばかりで、なぜか口を噤つぐんでいる。よくよく聞くと赤灯台右の一等地は島氏が狙っているようである。全域サラシで荷物を置く場所は1つの岩しか無く、しかもリュック1個がやっとなようだ。広く店開きしてしまう私には難しそうで、立ち込みになるのでエサや道具類は三脚にぶら下げておかなければならず、腰を掛けて休むところもない。私のような根性無しでは歯が立たないだろう。

バスの中では佐々木秀美氏が寿都岬先端に向かうといので心が動く。彼は先日の「北の釣り会」の大会でアブラコヤソイを釣って準優勝している。案内してくれると言うが、以前、女房とのドライブで寿都灯台から覗いた「降口」は、手ぶらで降りていくにも躊躇するぐらいの勾配だった。手がかりとなる物が何も無い平らで低い草原から一気に落ちる崖に足がすくんだ。重い荷物を担いでとなると……。別の下り口も聞いたのだが、なんだか道に迷いそうなので諦めることにした。

大平トンネル裏のワスリには3度入釣した経験がある。いつも一番の出岬目指していくのだが、波が高く周辺を彷徨さまよっていた。1回目は波を頭からかぶってボンズ。2回目は隣の出岬で優勝。3回目は前回の4月の大会で3位。本日は波が1.5mと予報しており今まで乗れなかった一番の出岬に乗れそうな模様である。

「なんだ。オママゴトのような釣りじゃないか」と言われることにならなければよい

が・・・。

ワスリ

大平トンネルを抜けた床丹で堀内氏と共に下りた。堀内氏は下り口にある平盤を目指していく。彼が得意とする釣り場を見学するために荷物を置いて付いていくと、平らな岩棚の前に深い溝が迫っていていかにも大物が潜んでいるような磯だが、そこから沖に向かって、縦に網が入っていた。彼はどこに竿を設置するかを悩んでいるようだった。

先を目指して進む。一番沖に張り出した出岬には誰もいない。波もべた風で、チョポンとも音を立てていない。安全なことを確認し、先端に出て竿をセッテング。まもなく、岩場左にカレイを狙った釣り人が2名入って、順調に釣果を伸ばしていた。私には30cm程のホッケが1匹やってきただけで後が続かない。

1時45分、床丹の方からヘッドランプの灯りが揺れながら列になって続々と近づいてきた。本日は北海道釣り連盟の大会が予定されており、床丹のすぐ先の永豊漁港で受付を済ましてから歌島漁港までの範囲で開催されているのだ。ランプの数から20名ほどが近づいて来ていたが、その灯りの一つ一つが岩場の先に出て行き、私が乗っている岩場よりもさらに先の岩場へと展開して落ち着いた。

私の所にも何名かが立ち寄ってはため息をついて先に進んでいった。そのため息が何を意味するのか分からないが、これで私が移動する場所はなくなってしまった。移動する場所がなくなってみると、ここで、最後までどっしりと構えて釣りを楽しもうと心が落ち着いてくる。4本目の竿を出し、不断は付けられない鈴を竿先に付けてやる。更に、いつ、ホッケの群れが来てもいいようにと浮き釣りも準備する。

和八日出光

年配の御仁が竿を出している私の前に来て海を眺め、すぐ左に陣取った。ベストの背中に和八日出光の赤い刺繍がある。

「隣に入らせてもらうよ。どっちに投げている。そしたら、ワスはこっちに打つからな。釣れてるかい？」

「いや一駄目ですね。ローソクボッケが1匹あがっただけです。和八さんのお名前はよく存じ上げております。新聞の釣り欄ではいつも上位の成績を上げているので、どんな方かと気になっていました。お会いできて嬉しいです。是非、ご指導下さい」

「ワスのこと知ってるかい。永いこと釣りしているからな」

「『和光会』の『和』は『和八』の『和』なのですか？ すると『光』は『日出光』の『光』をとったわけですね。『和光会』は和八さんが興した釣り会なのですね。背中の彫り物は自分の身分を背負っているようなもので、窮屈でしょうね。会員はどれ位いるのですか？」

「昔は大きな所帯だったが今は減ってきた。年寄りや逝っちゃうし、若いもんはわがままで、仲間との釣りを嫌ってるようだ」

「年を伺ってもよろしいですか？」

「70になる。ワスも年老いてきたのでみんなに迷惑を掛けるようになってきた。そろそろ引退も考えなけりゃいけんようになったが、釣りばかりはなあ」

「70には見えません。何時までもがんばってくださいね。年間、どれくらいの釣行なのですか？」

「去年は15回ぐらいだったが、昔は年間40回位も通ったものだ。釣り歴も40年ぐらいにはなるかな」

「よく、暇とお金が続きますね。私は年7回の大会に参加するのが精一杯で、特に出費のことを考えると頭を抱えてしまいます」

「ワスは特殊な技術をもった鉄工所をやっていた。今は経営を息子に譲ったが、釣りをするぐらいは何とかなるもんだ」

「和八さんは、淡水もやると聞いていますが」

「茨戸川での鮎釣りや鯉釣りも熱心に入れ込んだもんだ。鯉釣りは待ちの釣りだから、一本の大物を求めて何度も通い粘る。そして、狙い通りその1本をあげた時にゃ、満足感というか、達成感というか、そんなゾクゾクした気持ちに痺れてしまうんだ。やめられないねえ。」

「今日の釣りは、どうなるでしょうか。」

「底の岩がくっきりと見えるぐらい潮が透き通っている上、べた風なので、苦戦するぞう。ほら、お前さんの竿先揺れているぞ。」

「いいアタリでしたが、すっぽ抜けました。」

「今日は食い渋っているので、早合わせは禁物だぞ。我慢して十分食わせるようにせにゃあかん。先程から次から次へと質問してくるので、素人だと思っておったが、あんたの仕掛はなかなか凝ったものだね。エサは何を使っているかね。」

「イカゴロとカツオが中心です。他にイワムシとイソメとエビと・・・」

「何を狙っているんだい。」

「カジカとアブラコです。」

「ここではカジカは難しいぞ。アブラコなら何とかなると思うが・・・」

「和八さんのエサはすごいですね。イワムシが真っ赤で新鮮そうです。マキエは何を混ぜ込んでいるのですか。すごい臭いがしますが・・・」

「マグロが中心だ。それに色々とね・・・。魚に合わせて色々と調合しとる。お前さんは甘エビを使っているようだが、ワスはブラックタイガーがエサ落ちしないので使うようになってきた。あんたが乗っている岩の手前が深く抉れているので垂らし釣りでやるとアブラコが来ると聞いている。竿を1本、捨て竿にしておくといいと思うんだがなあ。ほら、この辺りだ。」

「ありがとうございます。なるほど、ここだけが深く抉れているようです。」

「来ました。来ました。いいアタリです。やっと来ました。アッ、なあんだ。ガンジでし

た。」

「随分大きなガンジだね。それがアブラコだとよかったんだが、残念だったね。諦めずに続けなさい。」

「イカゴロネット仕掛けをぶち込んでいるのですが、底の方から油がポワッ、ポワッと浮いて来て、虹色の油膜を広げています。その周りにタナゴが群れだしてきました。タナゴは必要ないので、竿を上げて遠投します。」

そんな気楽な会話が延々と続いた。

ルアー竿の先に黒っぽいワームを付けた若い釣り人が現れ、そのタナゴを発見して竿を振った。何度かやっている内に25cmほどのタナゴを釣り上げ、大声を上げて仲間を呼んだ。仲間がやってきて今度はブラーで底を探っている。間もなく、ブルブルと竿を曲げて30cm近いクロガシラを釣り上げた。例のように和八さんが話し掛ける。

「あんた名人だね。よく釣り上げたね。どこの釣り会？」

「豊平ブロックです。連盟の大会に参加しましたが投げ釣りには慣れていないので、ブラーやワームで狙っています。これなら自信があります。50cm程のアブラコも上げたことがあります。」

そう言って、魚をフラシに入れるためにその場を離れた。

「鹿島さん。だから諦めないで捨て竿をしておきなさいと言ったでしょう。クロガシラは同じ所にたまる傾向があるから捨て竿しなさい！」

「また、戻ってくる様子なのでここは諦めました」

先程の若者が戻ってきてブラーで探りを入れている。和八さんに言われたこともあり、気が気ではなく見守っていると、竿先が鋭く突っ込んだ。何やら長いものが海面で暴れている。「アブラコだ！」と若者が大声で叫ぶ。アブラコと聞いて、いやな予感的中し、また何か和八さんに言われるだろう。しかし、あがってきたのはこれまた50センチ近いガンジであった。変な話だがホッと胸をなげおろす。その若者は何事もなかったかのように、違う離れ岩へと身軽にヒョイヒョイと渡っていった。

「40m程先に頭を出している大きな根の向こうにアブラコがいそうだよ。是非、投げてみなさい。」

「あの根の向こうにですか？ たとえアブラコがかかったとしても、私にはあの岩を乗り越えさせる自信がありません。」

「根の向こうは多分挟れていて、魚がいるぞ。ワスなら1本バリにして投げるのだからなあ。魚が付いたら一気に巻き上げるとあの岩ぐらいなら簡単に乗り越えそうだがなあ。」

岩の向こうには手を付けられそうもないので、その岩の周りを何度探っても大物アブラコは現れなかった。ホッケは沢山釣ったが大物がこれまたいない。他に、クロソイ、ハチガラ、ガヤ、真ガレイ、砂ガレイ、アブラコ、タナゴ、カジカ、ガンジと10目釣りだが小物ばかりだ。なんだかんだと和八さんの会話を楽しんでいるうちに、時間だけが刻々と過ぎていってしまった。成績の方はオママゴトのようで散々であったが、これもまた私の

楽しい釣りの思いでの1ページを飾ることになるであろう。

審査結果

優勝	嵐 光博	1213点	(ホッケ 430mm+アブラコ389mm+3940g)	富浦平盤
準優勝	佐々木秀美	1131点	(ソイ 420mm+ホッケ 403mm+3080g)	弁慶 岬
3位	庄司幸吉	1118点	(ホッケ 394mm+カレイ 379mm+3450g)	折 川
4位	西川紘一	1026点	(アブラコ395mm+ホッケ 385mm+2460g)	寿都赤塔
5位	前野達志	968点	(ホッケ 398mm+アブラコ332mm+2380g)	軽 白

【つれづれ】

<大物>

佐々木秀美 42.0cmのクロソイ
嵐 光博 37.8cmのクロソイ
庄司幸吉 37.9cmのクロガシラ

<女性釣り師>

美釣会のメンバーが7名ほど堀内氏の乗っている盤に入った。みんなで寄せエサを打ち、ホッケを次から次へと釣り上げ、技術も大変上手だった。中にはアブラコやクロガシラの大物をあげる者もでてきて、ワイワイと姦しい。堀内氏の方は釣果が上がりず散々だったが、釣り場に女性がいると華やいだ雰囲気になっていいものだという。

<和八評>

有名なある釣りに所属する〇〇は釣りについては大層うまいが人付き合いが悪い。人間的にも問題がありその身につけた技術を人に教えない。名人とはそういうものかもしれないが、釣りに所属している以上仲間を大切にしてほしいものだ。名人といわれている人間は個性が強くて、釣りを分裂させかねない状況であると聞いている。あんたも話していた交輪会の岩本満はいい人だ。彼の周りには人が集まる。

最近女性釣り人も大会に参加しているが、みんな上手だよ。今日も沢山この先におりたはずだ。